土木学会論文集 D４（土木計画学：政策と実践）創刊に向けて

広島大学・フェロー会員・藤原章正

1. 新しい論文集部門の創設

2016 年 9 月の土木計画学 50 周年記念シンポジウム「土木計画学の未来　～理論に基づく実践、現場に根ざした理論～」、2020 年 4 月の土木計画学ワンデーセミナー100 回記念シンポジウム「土木計画学とは何か？～そのアイデンティティと今後の発展を考える～」の深い議論を受けて、この度、土木学会論文集Ｄ４（土木計画学：政策と実践）を創刊することとなった。土木計画学研究委員会の設置に意志と知恵をもって尽力された高橋裕先生と天野光三先生らのヒアリングを通して、50 年前の「土木計画学委員会」創立時に（「土木の計画学」を様々なサブ学問の一つとして含めた）「土木計画の学」を構想していた旨を再確認し、その「土木計画の学」をしっかりと推進していくことが目的である。

元来、土木計画は、まちの将来像・目標を描く「計画の像」の段階から始まり、そのための思想・理念・歴史などを育む「計画の理論」、計画目標にあった実現手法を探り出す「計画の手法」、計画を社会に示し会話する「計画の公表」、そして社会的課題をインフラの視点から解決する「計画の実践」の段階を踏む。学問の輪廻転生の渦の中で、現下の研究課題がこれらの計画段階のいくつかに議論が集中する時期があってもおかしくない。近年の土木学会論文集 D3 の対象が「理論」や「手法」に重点が置かれているとしたら、理論に基づく実践と現場に根ざした理論の両輪を実現する土木計画学の姿を保つために、「計画の実践」を議論する土木学会論文集 D4 を創刊することは、学会として自然な流れであると理解している。

2. 実践的研究

行政や民間企業の方との会話でしばしば出てくるキーワードが研究の「現実味」であろう。解決課題を構造化し目的関数を立ててモデル式を組成し、解法プログラムのコードを書いたところで、目的関数の境界条件の設定そのものに現実味があるのかという疑問が浮かぶ。課題がグローバルで多層的になるほど、功利主義やマキシミン原理などのモデル式形の選択よりも、条件設定の方が支配的になることは珍しくない。この条件設定のあり方を論ずる原著論文が新たに創刊される土木学会論文集 D4（土木計画学：政策と実践）に収録されることになる。

美しい理論モデルをつくってから当てはまる政策を探し求めるという、実践研究として画竜点睛を欠く研究姿勢に対する静かな批判である。家庭用小型ソーラーパネルを開発してから、あかり教育の実験現場を探し求めるといった技術開発姿勢に対する疑念にも共通する。土木学会論文集 D4 の発行が、土木計画学がもつ実践学としての機能への回帰となり、研究対象のバランスや研究着想の姿勢に影響が及ぶことを期待している。

人口減少期になって近視眼的な障がいの処理に目標設定が偏らないようにするために、建設業に関連する Society 5.0 の国際展開や SDGs の本質的な意味を捉えたアクションをとるために、土木計画学の出番が社会には数多くある。このような実践記録の論説などが論文として定期的に発行されることは正に時宜を得ている。

3. 土木計画学の両義性

土木計画学は、調査・計測、分析・予測、政策評価の理論と方法の真理を究める学問と、対象とする時や空間で描かれ実践される計画内容が変わりうる学問の対立を超えた両義性をもつ。これらは連鎖的発展構造のなかにあり、相互にサブリミナル効果をもちながら発展してきた。この土木計画学という学問に関連する論文を、土木学会論文集Ｄ部門というプラットホームの上に共通概念を維持しつつ、異なる査読基準でピアレビューを行い募り、分野最上級のジャーナルとして情報発信するために土木学会論文集 D3（土木計画学：理論と方法）と土木学会論文集 D4（土木計画学：政策と実践）を並行して刊行する。

50 年の節目を超えた土木計画学研究委員会のひとつの決意表明でもある。

キーワード：土木計画，実践的研究，土木計画学の両義性
連絡先：〒739-2115 東広島市鏡山 1-5-1 広島大学大学院先進理工系科学研究科，TEL&FAX: 082-424-6921

© Japan Society of Civil Engineers